

体調不良短編集―サンプル―

全年齢です。

目次

カルーアミルク	P2
捨て犬保護施設(梅沢×郁)	P7
大人専用保育園	P13
人体改造博物館(諏訪×千尋)	P21
従順ペットの発情生活	P33

カローアミルク

「諒」

朝食の後、普段なら歯磨きを終えて書齋にこもるはずの篠崎が、珍しくダイニングに戻ってきた。
た。

洗いものから視線を上げ、篠崎を見る。

「どうしました？ お茶飲みます？」

「すまない、少し寝るよ」

「え……熱っぽいですか？」

洗い途中の食器を置き、適当に手を水で流して。エプロンで手を拭きながら篠崎の元へ向かう。

「ああ、少しだが」

「大変！ 体温計を持ってきますね」

先に寝室に行かせ、救急箱から体温計を引き抜いて寝室に急ぐ。

篠崎はパジャマに着替えを始めていた。見ても体の動きに違和感はない。脱いだ服を回収し、ベッドに入った篠崎に体温計を渡しながら問う。

「寒気はないですか」

篠崎は頷いた。やはりその様子も普段と変わらないように見える。

しかし電子音の鳴った体温計を奪うように見ると――。

「三十八度二分……病院に行きましょう」

子供ならまだしも、大人の三十八度超えはきつい。時期的にインフルエンザではないだろうけれど、これ以上熱が上がれば関節の痛みだって出てくるかもしれない。

――なのに、篠崎は笑っていた。

「いや、これくらいなんでもないよ」

まるで「大げさだな」と言いたそうな顔。

「ダメですよ」

「しかし他には何も症状がない」

「……でもこれから出るのかも」

「大丈夫だよ、心配いらない」

「……分かりました。じゃあ今日一日様子を見て、悪化するようなら病院に行きましょう」

「分かった」

「解熱剤を持ってきます」

篠崎が体調を崩すなんて珍しい。でも篠崎の言う通り、風邪らしき症状は何も見られなかった。
(咳をしている様子もなかったし……疲れかな……)

急いで水と救急箱を持って寝室に戻ると、たったそれだけの間にもかかわらず、篠崎はすでに

目を閉じてしまっていた。枕元に近付いても瞼は上がらない。すでに眠りに落ちているらしい。さつきまで普通に会話をしていたというのに。

(今の会話も眠気を我慢してた……?)

篠崎はいつでも安西を優先する。しかもそれをこちらに悟らせない。だからいつも無理をしているのではないかと不安に思っていた。でもずっと元気で、だからこれからも風邪一つひかざずっと元気だ——。

篠崎の寝顔を見たことはこれまで数回しかない。それも夜中にトイレに起きたときばかり。でもそのときだってまだベッドに来ていないこともあった。

(忙しすぎなんだよなあ……)

お金のかかる生活をしているつもりはない。大きな買い物をするでもないし、毎日自炊しているから食費だって高いというほどのこともない。

(甘やかされ過ぎかな)

プレゼントされたものを思い浮かべる。食べ物駄菓子から高級スイーツ、それ以外にぬいぐるみ等の残るプレゼントもたくさんもらった。

(でも大きな買い物ってほどでもないよなあ)

車だって知り合ったときそのままだ。買い換えてはいないし引越だってしていない。模様替えだってしていない。篠崎の趣味といえば妖怪と時計くらい。でもその時計だって、以前安西がプレゼントして以来、もうこれ以外使うことはないからと一つも買っていなかった。

(やっぱり仕事が好きなんだろうなあ……)

新しいことをするのが好きだと言っていたから、きっと日本で始めた事業が楽しいのだろう。(体壊しちゃ意味ないんだけど……)

健康あつての趣味と仕事だ。もし趣味ではなく金銭的なことを心配して仕事を詰めているのなら、自分も働きに出ると言おう——そう心に決めて本棚から文庫本を取り出す。もう何度も読んだ本だ。けれど、飽きることのない大好きな本。それをベッド脇のスツールに腰掛けて読む。ここなら篠崎が目覚めたときにすぐに気付くことができるから。

「あ、篠崎、」

篠崎が目覚めたのはそれから二時間後。結局読書は進まなかった。どうしても様子が気になっちゃって、何度も顔色を見て、汗を拭いて……としてしまったのだ。

「……寝てたか」

体を起こそうとする篠崎を制止して体温計を差し出す。

「熱を計りましょう」

こちらでも篠崎は自分でしようとした。けれどこんなときくらい頼ってほしくて、出された手を無視して脇に手を入れる。

「三十八度五分……上がってる……」

まさか上がっちゃってしまっているなんて。少しくらいは下がっているだろうと思ったのに。

捨て犬保護施設

なんだかおかしい。お腹が変。

「郁くん、おまたせ。ご飯ができたよ」

梅沢サンの声に顔を上げ、その姿と近付いてくるお皿に意識を向けたときだった。漂ってくる臭いに吐き気がこみ上げた。

「うええっ」

口からどろっとしたものが出た。

「郁くんっ！」

ガシャンという音が鳴った。何があったのだろうか。でも顔を上げられない。

「うええっ」

また出た。苦しい。息が上手にできない。

「郁くん、苦しいね、全部出してしまおうね」

背中に梅沢サンの手のぬくもりを感じた。ゆっくり円を描くように撫でてくれる。

「うううええええ」

どろどろしたものがたくさん出てきた。それにツンとした臭い。苦しい。お腹の中がぐるぐるする。

「うえええええ……」

途中から、何も出なくなった。でもお腹の中が潰れるような、苦しい感覚は続いていた。

「郁くん……」

郁の前足に、梅沢サンの手が重なった。温かくてちょっとほっとする。

「怖かったね。苦しいね。気付かなくてごめんね」

すり、と撫でられると安心した——安心したと思う余裕が少しだけできた。

「……もう出ないかな。一度お口をすすごうか」

抱っこで連れて行かれたのはお風呂だった。

「すぐに戻るから、少しだけ待っていてね」

郁をマットの上を下ろし、梅沢サンは一度お風呂から出て行った。一緒にいてもらえないのが怖くて、寂しくて、でも引き留めることもできずに丸まっていると、梅沢サンはあっという間に戻ってきてくれた。そして歯ブラシのときに使うコップでお湯を渡される。

「少しでいいよ。くちゅくちゅするのが怖かったら、口に入れて出すだけでもいいから」

よく分からなかったけれど、コップの種類とくちゅくちゅで歯ブラシのときのあれだと分かった。でも口に何かを入れるのは怖かった。また苦しいのが来るかもしれない。

「——怖いかな。やめておこうか」

コップに手が掛けられた。でもせっかく持ってきてくれたのに——勇気を出して少しだけ口

に入れ、でもやっぱり怖くてすぐに吐き出した。

「頑張ったね。無理はしなくて大丈夫だから」

また優しく背中を撫でられた。ほっとする。少しずつお腹の中のぐるぐるが消えていく。

もう一度水を口に入れて、今度は少しだけ動かしてみた。ぐるぐるは増えない。大丈夫、と自分に言い聞かせながら吐き出す。

「うん、上手。お口の中がすっきりしたかな」

そういえば口の中の苦いのがなくなった。頷いて、マットの上で伏せをする。

(やっぱりまだぐるぐるする……)

お腹のぐるぐるはなかなか消えない。また苦しいのがきそうで怖い。

「体を流そうね。そのまま動かなくていいからね」

オムツが外されると、シャワーの柔らかいお湯が体を流した。それにつれて、漂ってきていたツンとした臭いもなくなっていく。

「冷えてしまうかな……でも溜めるには時間がかかるし……」

ぶつぶつと梅沢サンが何かを言った。意味は分からないけれど、考える気にもならなくて、そのまま目を閉じておく。

「……ベッドに入ろう。温めてあげるから」

温かかったシャワーが止まると、一気に肌寒さを感じた。浴室のドアが開くともっと寒くて、体がぶるぶると震えて、おしっこが出た。

「ああ、寒かったね」

しよわしよわという音と、おしっこの臭い。せっかく体を洗ってもらったのに。でもごめんなさいの姿勢を取る元気はなかった。

「ごめんね、もう一度流して、それから急いでベッドに行こう」

梅沢サンはさつきよりも少し熱いお湯でおしっこを洗い流してくれた。それからすぐにタオルで拭いて、ベッドまで大急ぎ。それから手早くオムツをして、お布団を顎のところまで掛けてくれる。温かい。

それからもう一度、梅沢サンはどこかに行った。寂しい。いつものようにぎゅっとしてほしいのに。でもやっぱり今度も、あつという間に戻ってきてくれた。

「一人にしてごめんね。また吐きそうになったらこれに出してみようね。でも間に合わなかったら大丈夫だから」

見せられたのはお風呂の洗面器にビニール袋を掛けたもの。吐きそう、というのはさつきのぐるぐるのことだろう。

「わう」

「風邪かな……どこか痛いところはある？」

「わうう」

ない、と意思表示すると、梅沢サンは少しだけほっとしたようだった。

「寒くないかな」

大人専用保育園

「あおくん、今日は少し暑いから窓を開けましようか」

午前八時。いい加減起きなければと思いつつ、上条が休みだからと柔らかい毛布の中で丸まっているときに掛けられた言葉。異常気象で気温が上がるのだろうかと毛布から顔を出してみると、室内であつても毛布の外の空気はひんやりと冷たかった。

(寒い……)

絶対に出たくない。ましてや窓なんて開けられたら、それこそ今日は一日中毛布の中から出たくなってしまうだろう。

「あおくん、今日はかくれんぼの気分ですか」

「やーう」

もふもふしていたい。毛布の中で上条とイチャイチャしたい。なのに上条はばさりと葵の毛布を剥ぎ取ってしまった。

「あおくん、見つめました」

「やああああ!」

寒い寒い寒い。室温に慣れればそれほどでもないのかもしれないけれども、いきなり毛布を剥ぎ取るなんて。まずは顔を出し、それから肩を出し……とゆっくり寒さに慣れさせてほしかったのに——おや、と思った。普段上条はこんな風に葵を起こすことはない。

ここ最近毛布の上からぎゅっと抱きしめて、「起きる時間ですよ」と声を掛けてくれていた。その甘やかしが好きでわざと丸まって、仕方ないなあというかのように笑ってくれるのを待った。それで、毛布から出ても寒くないようにと毛布に入ってくれた上条にぎゅっと抱きしめてもらい、腕の中に包まれた状態でゆっくり毛布をめくってもらおう。そうやって少しずつ少しずつ寒さに慣れさせてもらっていたのに——。

(テンションもなんかおかしいような……?)

何かいいことでもあったのだろうか。それともいい加減甘えてないでしっかりと起きろというらだちを隠せなくなったのか——。

「さあ、あおくん」

違和感の答えは、上条に抱き起こされたときに分かった。

(熱い!)

熱だ。上条は発熱している。手で分かるくらいなのだから、かなりの高熱だろう。

「あ……」

「ん?」

「あ……う……」

この様子だと、おそらく上条は自分の体調不良に気付いていない。それに普段より強引になっ

ていることを踏まえると、大人の葵として発言すれば機嫌を損ねてしまう恐れもあった。

(どうしよう……)

「あおくん、今日はとてもいいお天気ですよ」

サツと音を立てて開けられたカーテン。確かに快晴で、とてもきれいな空だけれど――。
カラカラッ。

吐き出し窓が全開にされると室温が一気に二度は下がった。いや、五度……きつとこれは十度は下がったに違いない。寒い。

「風が気持ちいいですね」

(嘘でしょ……)

上条が体調を崩すのは初めてだった。いや、少なくとも葵が気付いたのは初めてだ。でもまさか、こんな風に性格まで変わってしまうなんて。

(とりあえず寝てほしいんだけど……)

でもやはり、普通に言っても受け入れてもらえる気がしない。かと言って頼れる相手も浮かばない。

(秘書さん……)

いや、そもそも連絡を取る手立てがない。

(自分でなんとかしなきゃ……!)

「あーう」

「ん？ どうしました」

「あうう……けえしゃあ」

吐き出し窓のところ立っている上条に向かってベッドから手を伸ばす。これを見ると、上条は必ず嬉しそうな顔で抱きしめてくれるから。

「ああ、甘えん坊ですね」

可愛い、という言い方は普段と変わらない。覆いかぶさるようにぎゅつと抱きしめてもらい、そのままベッドに寝転んでもらえるよう、体重を掛けてころんと転がり上に乗る。

「ああ……可愛い」

上条の体温はシャツ越しでも分かるほどに高かった。やはり熱がある。

「けーしゃ、けえしゃあ」

甘えて顔を胸元に擦りつけると、気を良くしたのか上条は頭と背中を撫でてくれた。

「あううう」

「まだおねむなんです。休日ですから、ゆっくりねんねしましょうか」

「けえしゃー!」

(やった!)

すりすりと頬を擦りつけていれば、一緒に寝たいのだと分かってくれたようだった。体は胸から下ろされたけれど、腕枕でぎゅつと抱きしめてくれる。

「あうう」

人体改造博物館（諏訪×千尋）

おかしいな、と思ったのは、普段千尋より早く起きる諏訪がまだベッドに横になっていたのであった。

（寝てる……）

昨日は仕事だった。いつも通り昼には帰宅して、シャワーで体を清めてもらって。その後はゆったりと過ごしていたけれど、もしかしたら疲労が溜まっていたのかもしれない。

（睫長いなあ……）

普段、こうして諏訪の寝顔を見ることはほとんどない。諏訪はいつも千尋より後に寝て、先に起きる。

普通の生活をしていれば、夜中に排泄のために目を覚ましたりして起きることもあるだろう。しかし尿道口を会陰に移行してから、尿は勝手に漏れ出すようになっていた。もう、尿意を感じることもほとんどない。だから暑いとか寒いとか体が痛いとか、そういったことがなければ朝になるまでぐっすりと眠り続けてしまう。しっかりと寝られるのはいいことだけれど、諏訪の寝顔を見るチャンスも失っているのだと思うと少しだけ寂しい。

（鼻筋も通ってるし……）

きれいな顔だ。鼻は高く頬もシュツとしていて、唇は薄い。今は隠れてしまっているけれど瞳には少しの濁りもなくて、ただとにかく全体がきれい。

（いいなあ……）

カッコいい。こんな人が自分の恋人だなんて信じられないな、と思うくらい。

（この人に……僕は……）

移動は抱っこ、排泄はオムツ。食事も食べさせてもらって、お風呂だつて入れてもらう。目が合えば優しく微笑んでもらえて、名前を呼ぶ声はいつだって甘くって。そんな、甘やかされる毎日。

（幸せだなあ……）

四肢がなく、自分では何もすることができない。それでもこの生活は幸せに満ち溢れている。出会ってから今日までのことを思い返しながら寝顔を見つめていると、諏訪はコホ、という苦しそうな咳をした。

「……匠さん？」

様子がおかしい。じつと見ていると、なんだか顔色もあまりよくないような気がしてくる。

「匠さん、匠さん！」

どうしてもっと早く気付かなかつたのだろう。寝顔を見ていたのはまだほんの五分程だとは思うけれど、その五分が悔しい。

「匠さん！ 起きて！」

けれど諏訪は目を開けてくれない。
怖い、と思った。

もしこのまま諏訪が目を覚まさなかったら——自分には諏訪を助けることができない。
(どうしようっ！)

体を揺さぶりたい。体に触れて体温を確認したい。でもそれすら今の自分にはすることができない。
ない。

「匠さんっ！」

救急車を——そう思っても、自分には電話を持つための手がないのだ。

「あっ！」

思い出した。以前、「もし俺に何かあったら」と諏訪が設定してくれていたもの。

「助けて！」

大きな声で叫ぶ。

「助けて！ 助けにきて！」

どこからともなく、電話のコール音が聞こえた。

『もしもし！』

電話が繋がった。音の方向は分かるけれど、マイクがどこに置かれているのかまでは分からなくて、でも必死に声の聞こえた方向に向かって叫ぶ。

「匠さんが！ 諏訪さんが！」

『どうしました』

この声は藤永だ、と気付いた。支配人の藤永。諏訪は「助けて」と声を出すことで藤永に電話が繋がるようにしておいてくれていたのだ。

「匠さんが起きなくて、顔色も悪くて！」

『すぐに行きます』

でも通話が切れることはなかった。ガチャガチャ、ボタン！ と大きな音がして、また声が聞こえ始める。

『諏訪くんの異変は他に何かありますか』

「えっと……」

目と耳しか頼れるものはない。

「体温は分かりません。一度咳をしていました」

『顔色は？ 赤いですか？』

「あ……多分、青白いと思います」

でも頬は赤いような気もする。もう、パニックできちんと判断することができない。
(触れたら分かるのにな)

『分かりました。千尋くんは一緒のベッドにいるんですね？』

「はい！」

『あと数分で着きます。鍵は諏訪くんから預かっていますから勝手に入ります』

従順ペットの発情生活

(あれ、コップが置きっぱなし……)

折坂は潔癖症なのではないかと思うほど片付けを小まめにする。なのに、珍しくテーブルの上にコップが一つ置かれたままになっていた。

ちら、と書斎のドアを振り返る。今臯月もいた部屋だ。折坂のタイピングの音を聞きながらお昼寝をして、排泄のために出てきたところ。ペットシートの上で腰を下げ、会陰の尿道口から勢いよく排尿をする。

(忘れてるのかな)

まあ折坂も人間だし、そういうときもあるだろう。きっとコップを使った後にトイレにでも行って、そのまま忘れてしまったのだろう。もしくは頭に浮かんだ構想をどうしても忘れる前にパソコンに入れておきたくて、そちらを優先したとか。

(うん……多分そっち)

恐らく後者だ。以前から夜中でも何かいい案が浮かぶとベッドを抜けて仕事を始めてしまうようなことがあるので、なんら不思議ではない。

(邪魔しない方がいいかな……)

そこまで熱中していると知ってしまうと、部屋に戻る音や気配でさえ邪魔になってしまうのではないかと思ってしまう。

そのまま中庭にでも下りて木陰でお昼寝でもしようかな、と思っていると今度はソファに置かれたままのシャツに気が付いた。

(んんん……?)

臯月が座ることのない人間用のソファ。「臯月くん」と呼ばれたときだけ座ることがあるけれど、落ち着かなくていつも下りたくなくなってしまふところ。そこに折坂の真っ白なシャツが置かれていた。

(ううううん?)

今日の折坂の服を思い出す。朝はシャツを着ていたように思う。

(あ!)

そういえば、昼食のときに暑いと言って脱いでいたような気がする。いつでも全裸の臯月に合せて室内環境が整えられているので、折坂はよくそうして体温調節をしていた。

「うーん……」

それにしてもおかしい。コップにシャツ。普段なら有り得ない放置っぷりだ。

でも、臯月の世話は普段通りだった。今日はまだ性的なおねだりはしていないけれど、食事も水分の補充も、撫でる手も優しいままだった。

「うーん……」

コップ一つならまだしもシャツもとなるとやはり気になる。下ろしていた腰を上げ、のそりと四足で歩き出す。

隙間の開いた書斎のドア。そこに頭をめり込ませるようにして室内に入る。

カタカタカタカタター——一定の強さ、タイミングで迷うことなく打ち続けられるキーボード。それもやはり普段と変わらない。

(集中してるよなあ……)

本当は邪魔をしたくない。普段仕事の手を止めさせてしまうのは排便のときと、気持ちいいことをしてほしくなってしまうときだけだ。それ以外では極力邪魔をしたくないのだけれど、どうしても気になってしまった。

「わう」

「ん？」

「わう！」

「どうした？」

皐月を見下ろす顔をじっと見つめる。普段と同じような気もするけれど、少しだけ顔色が良くないような。

「わう！ わうっ！」

首を傾げながら折坂がこちらに手を伸ばした。そして頬に触れる手。

その手は、燃えるように熱かった。

「わうわうわう！」

熱だ、とすぐに分かった。

「わう！ わう！」

「ん？」

どれほど吠えても、折坂は不思議そうな顔をするだけだった。

(熱に気付いてない?!)

「わう！」

自分のことになるとこんなに鈍いなんて！ と眩暈を覚えながら大急ぎでリビングに戻る。

そして洪々手を使い棚から救急箱を取り出した。

(もうー！)

「どこか痛いのか?!」

「わうっ！」

後をついてきていたらしい折坂が、怖いほどの勢いで皐月の肩を掴んだ。痛い。普段だったらそんなに心配してくれたのかと嬉しくなるのに、今ばかりはその心配は自分に向けてくれ、と思ってしまう。

「わう！」

「皐月？」

どうやら本当に分かっているらしい。洪々口を開く。

「ごしゅゝさ、けほっ、ごほっ」
しかし、かなり久しぶりに声を発そうとしたせいか舌が上手く動かなかった。これだから人間は嫌。

3万3千文字。

ものによって長さが違います。

よろしく願います！

風邪短編集―サンプル―

gooneone (ユーザーわんわん)

2020/12/19

メール:gooneonegooneone@gmail.com

pixiv:19591291

Twitter:@gooneone11

インスタ:gooneone

